

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信

第 17 号
2023. 3. 31

台湾における大衆文化とコロナ禍の影響

細井 尚子

大衆文化の範疇は広い。ここでは室内外に分け、室内は上演空間、室外は「酬神」（神に報いる）活動を取り上げる。というのも台湾では、パレードや演劇などを伴う酬神活動が人々の生活の中にあるからだ。

台湾の新型コロナウイルス対策は、二〇一九年十二月三十一日朝二時に、疾病管理署医師グループが共有した武漢政府が前日に出した緊急通知と武漢の医師の発信情報の確認から始まった。当日一八時の記者会見で武漢直行便の機内立ち入り検疫と国民への注意喚起を始め、一月十二日に専門家を武漢に派遣し調査、二十日に中央ウイルス指揮センターが設置され、二十四日に「智恵防疫系統」（防疫対策、情報提供のためのプラットフォーム作成など）の費用など八項目）公開、二十五日に

関連特別法案が成立し、組まれた特別予算の七割弱が経済振興分野で、文化芸術産業への補助も含まれており、二十七日に文化部が「文化芸術救済・活性化対策」の詳細を提示した。

二〇年は一月二十五日が春節、二月八日が元宵節だったが、防疫対策の初動の速さ、情報公開・共有の徹底で、大規模な酬神活動を中止・延期する寺院もあった。通常、酬神活動の実施は神意を問う占いで決まるが、戦中の空襲時なども実施できなかった、実施できなくても民衆も神も責められないといった論調の中、中央ウイルス指揮センターは三月四日、酬神活動を含む集会活動ガイドラインを出し、延期・一時停止の検討を要請、実施する場合は求める感染対策を示した。これを受け、例えば旧暦三月十五日の保生大帝の誕

目次

台湾における大衆文化とコロナ禍の影響

「旧江戸川乱歩邸施設整備事業」と大衆文化研究センターの活動について

鳥羽の江戸川乱歩館復活に向けた動きについて

〈新資料紹介〉「ほんものが生きてゆけない世間」への憂い

旅する乱歩 上諏訪編

乱歩が愛した十七代目中村勘三郎

シンポジウム「雑誌『宝石』と戦後日本の探偵小説」報告

トークイベント「乱歩をテレビドラマにする方法」

NHK「探偵ロマンス」制作秘話」報告

江戸川乱歩賞受賞者の方々を迎えて

乱歩賞贈呈式体感記

彙報

細井 尚子

金子 明雄

小松 史生子

石川 巧

丹羽 みさと

後藤 隆基

松田 祥平

王 羽萌

秀島 希望

濱下 知里

生日を挟んで三か月弱続く「保生文化季」は、「保生大帝同意」を経て、盛大な花火や燃える獅子、二十本以上の芝居などは中止、四・五月に五日間の儀式のみになった。一方、室内の上演空間には六月六日まで「梅花座」（前後左右を開けて着席）が求められた。

二一年一月二十一日、四段階の感染症警戒レベルが策定され、感染源不明の感染例が出れば二級で室内百名以上、室外五百名以上の活動停止、一週間に三件以上のクラスターまたは一日十名以上の感染源不明の感染例が出れば三級で、室内五人以上、室外十人以上の活動停止となった。五月からデルタ変異株が蔓延したため、二一年は五月十一日以降、二級でも三級でもなか

ったのはわずか三十日間である。しかし感染対策を十分に施すなどの条件付き緩和により、上演空間は五月十三日から九月二十六日が梅花座、以降は全席開放され、演者・スタッフに感染者が出た場合は延期・中止となった。

筆者が台北で暮らすようになった二二年度は六月以降、前日までに届く公演延期・中止メールもほぼなくなり、室外での上演にワクチン三回接種証明を提示することもなくなった。室内集合写真はマスクを外してよいなど調整される防疫対策を個々に守りつつ、劇場や広場で芝居を見たり、酬神活動に参加する生活に戻っている。

（本学異文化コミュニケーション学部

教授）